

44.

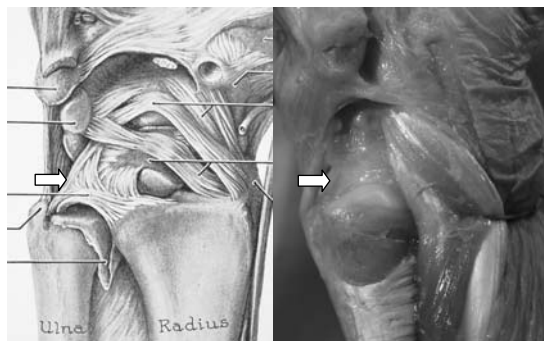
8) 西島雄一郎：上腕骨小頭骨折の治療経験. 臨整外 1986 ; 21 : 577-583.

## ほっと ぷらざ

### 三角線維軟骨複合体損傷とは？

外傷による手関節尺側部の疼痛は、以前より橈骨遠位端骨折後の変形治癒の際に、尺骨頭周辺の遺残する変形と疼痛として知られてきた。近年、骨折を伴わない手関節の捻挫後に手関節尺側の腫れと疼痛が持続する症例が注目され、三角線維軟骨複合体損傷として診断され様々な報告がなされている。私たちは、手関節尺側部を掌側より観察し、解剖学的に尺骨茎状突起基部より三角骨と有頭骨に張る強力な靭帯があることを確認した。それらは尺骨三角骨靭帯(**ulno-triquetral ligament**)、尺骨有頭骨靭帯(**ulno-capitate ligament**)と呼ばれ、両者はまとめて三角靭帯(**triangular ligament**)とされている。三角靭帯は同時に三角線維軟骨の掌側を補強している靭帯である。前腕と手関節をさまざまな方向に動かして三角靭帯の緊張を観察すると、三角靭帯は前腕の支持構造である尺骨と、橈骨および手根骨を連結するリンクの役割を果たすことが明らかとなる。尺骨茎状突起基部より三角靭帯を切り離すと、遠位橈尺関節と手関節が尺骨より解離する。さらに、切り離した三角靭帯を茎状突起基部に縫合すると、手関節尺側のリンクは回復する。これまで、この病態が明らかにされていない理由は、掌側より手関節尺側部を観察する経験が少なかったことと、断裂した靭帯は変性して肉芽化しているため、手術時に同定できなかったことによると推測している。

(三角靭帯⇒)



札幌第一病院 整形外科 青木光広